

2003 年 1 月 8 日

人間科学研究科委員長 殿

## 鶴若 麻理氏 博士学位申請論文審査報告書

鶴若 麻理氏の学位申請論文を下記の審査委員会は、人間科学研究科の委嘱をうけ審査をしてきましたが、2002 年 12 月 26 日に審査を終了しましたので、ここにその結果をご報告します。

### 記

1. 申請者氏名：鶴若 麻理
2. 論文題名：語り (ナラティブ) からみる高齢者の生きがい

### 3. 本文

#### (1) 本論文の趣旨

本論文では、高齢者が生きがいという言葉の意味をどのように捉えているのか、また老いていく過程の中で感じとる生きがいとは何かを明らかにするために、高齢者自身の語り (ナラティブ) に注目する。本論文では、この方法の対象者として長寿で活動的な高齢者 (新老人の会)、さらに今までの先行研究では取り上げられることのなかった対象者として、特別養護老人ホームや特定有料老人ホームなどの施設入所者、何らかの障害をかかえて通所リハビリテーション事業所に通う高齢者、ホスピスの高齢末期がん患者の 5 つのグループをとりあげた。そして、これらのグループの中の後期高齢者 (75 歳以上) を主として選び、筆者自らのボランティア活動を通じた継続的なかわりから、高齢期における生きがいの意味とその本質を語り (ナラティブ) の手法により明らかにすることが、本論文の主要な目的である。

このほかに、本論文では高齢者の生きがいに関する内外の諸研究のサーベイを行い、生きがい概念の解明を試みる。それと同時に、生きがいにぴったりと対応する言葉をもたない諸外国の中から英語圏、とりわけアメリカを中心に使われている類似概念すなわち *Spiritual Well-being* をとりあげ、それがクオリティ・オブ・ライフの枠組みにおいてどのように捉えられてきたか、またどのような背景があるのかを検討する。これらの作業によって、本論文の中心テーマである生きがい概念のモデルに、より普遍性を与えることができると考えたからである。

#### (2) 本論文の構成と内容

本論文は、上述のような趣旨にもとづいて、6 つの章と膨大な量にのぼる 105 人の高齢者との個別インタビューの記録 (事例集) からなっている。すなわち、第 1 章 問題の所在と語り (ナラティブ) のアプローチ、第 2 章 高齢者の生きがいに関する文献的検討、第 3 章 クオリティ・オブ・ライフと *Spiritual Well-being*、第 4 章 高齢者が語る生きがい、第 5 章 高齢末期がん患者が語る生きがい、第 6 章 まとめと考察、および事例集で

ある。

第1章では、今日、医療や介護の分野で用いられるようになった語り（ナラティブ）の方法の特徴と意義について、方法論の観点から考察を加えている。

第2章では、先行研究のサーベイが行なわれ、生きがいに関する諸理論、わが国の生きがい対策とその展開過程、高齢者の生きがいに関する国際比較研究などがとりあげられ、広範にわたって詳しい検討がなされている。

第3章では、生きがいに類似した概念として Spiritual Well-being をとりあげ、それとクオリティ・オブ・ライフとの関係について分析を行なっている。とりわけ、それがアメリカで高齢者の視点からどのように捉えられてきたかについて論じている。そこでは、1961年から始まった一連の高齢者に関するホワイトハウス会議での議論の展開が、主要な役割を果たしたことが検証されている。

第4章では、新老人の会（51人）、通所リハビリテーション（22人）、特定有料老人ホーム（7人）、特別養護老人ホーム（21人）の5つのグループの計101人（高齢末期がん患者4人を含めると合計105人）を対象に行なったインタビューの詳細な記録について、精緻な解説作業が紹介される。その結果、高齢者の語り（ナラティブ）の中から生きがいを感じさせるものとして、①連帯感、②達成感・追求感、③充実感・満足感・幸福感、④有用感、⑤価値の5つの領域が示された。これらは独立しているのではなく、互いに関連しあっている。また、これらの領域と大きくかかわっているものとして、自己および人生の肯定という要素が抽出できることが明らかとなった。

各グループによる違いも明らかになった。新老人の会のグループでは、②達成感・追求感および④有用感を求める傾向が際立っていた。通所リハビリテーションのグループでは、家族との関係性において①連帯感が強調されていた。特定有料老人ホームのグループでは、現在の生活を大切に生きていくという③充実感・満足感・幸福感がより強調されていた。特別養護老人ホームのグループでは、①連帯感の領域において他者と交流したいという欲求が強くみられた。高齢末期がん患者は、死に直面することにより①から④の領域が実感できず、また⑤の領域では価値観の崩壊がみられている。つまり、生きがいの喪失の状況であるが、その中でも自分の生きがいを見出そうとする傾向があった。

また、ここでの作業によって、高齢期の生きがいは過去から現在に至るまでの時間の流れの中で捉えていくことが重要であることが示された。対象者の多くは、今までの人生の満足を通して現在の自分の存在を意味づけており、生きがいは自己や人生への肯定を通して語られることが示された。生きがいはないと語った事例も合わせて検討してみると、生きがいをもつ、生きがいを感じるということは、いかに主体的あるいは能動的に生きているかと思えるかということであり、それは自己に対して誇りをもつということにも通じていることが明らかとなった。

第5章では、ホスピスにいる4人の末期がん患者について、筆者が行なったボランティア活動の介護場面において、折々に断片的になされた会話が丹念に記録されており、筆者はその4つの事例から死の臨床にある患者の生きる力を捉えようとしている。そこでは、

生きがいをめぐっていかに **Spiritual** なものが大きな意味をもつかが証明されている。

第 6 章は、本論文のまとめである。高齢者のクオリティ・オブ・ライフにおいて、生きがいは 1 つの側面ではなく、むしろ身体的状況、心理的満足、自立や活動のレベル、社会的関係、生活環境、信念などあらゆる領域にかかわる全体を包含するものであるといえる。そのため、高齢者の生きがいの内実を明らかにするためには、高齢者自身の語り（ナラティブ）に注目することが必要かつ有効であることを、本論文は検証した。また、バイオエシックスの立場からも、高齢者の語り（ナラティブ）を通して生きがいを捉えるというここでの方法は、介護、看護、医療の現場でのケアの向上に対して新しい視点を提供しうるものであると結論づけることができる。

### （3）本論文の特長と評価

本論文は、高齢化の進展という今日の時代状況にあって高齢者の生き方が問われていることにかんがみ、高齢者の生きがいの特徴と意味を彼らの語りの中から探り出そうとするものである。高齢者たちの声に耳を傾ける前に、本論文では、まず内外の先行研究にもとづいて生きがい概念について徹底した究明を行なっている。この点が本論文の第 1 の特長である。

そして第 2 は、アメリカで提起された **Spiritual Well-being** の概念に着目し、生きがいとの関連を追究していることである。精神的充足とでもいうべきこの概念について、関連する資料を渉猟して綿密な検討を加えている。わが国では、この種の研究はほとんどなかったといってよい。

次に、高齢者とのインタビューによって収集された生きがいについての物語りは圧巻であり、その解読の作業はまさに本論文の核心をなすものである。5 つの高齢者グループ（101 人）と末期がん患者（4 人）を対象とした長時間にわたるインタビューを可能にした集中力には瞠目せざるをえない。特に、健康な状態にない高齢者が多く、聞き取りも通常の構造化された手法は適用できず、作業は困難を極めたと思われる。

にもかかわらず、収集した物語りの文脈の中から生きがいにかかわる箇所を抽出し、分析することにより、生きがいについて 5 つの領域を設定し、それぞれに該当する具体的な生活項目を位置づけ、1 つの生きがいモデルを作りあげている。この点に、本論文の独自性が遺憾なく発揮されており、このことが最大の特長点となっている。

またこのことは、本論文で採用された語り（ナラティブ）のアプローチが、高齢者が生きることの意味をどう内面化しているかを総体として把握するための手法として優れたものであることを示すものである。このアプローチは人間の生存にまつわる社会、家族、友人などの生活条件や心理、感情、信仰などの内面、さらには **Spiritual** な側面までも、語りの文脈に即して総体としての理解をはかることができる点において、すぐれて人間科学的であるといえよう。その意味で、本論文は立派な人間科学の論文として高く評価することができる。

105 人に上るインタビューの記録は 140 ページ以上にわたる。この膨大な情報の山から、生きがいについて有意義な情報を抜き出すために、筆者はその該当箇所にしるしを付けて

取り出して分析している。語りを総体として理解するために、やむをえず分析的手法をとらざるを得なかった点は、この方法の限界かもしれない。しかし、このことが本論文の価値を決して下げるものではない。

以上にあげた本論文の特長と評価にもとづいて、審査委員会は一一致して本論文が博士（人間科学）の学位を授与するに値するものと判断する。

鶴若 麻理氏 博士学位申請論文審査委員会

主任審査員 早稲田大学教授 博士（人間科学）（早稲田大学） 嵯峨座晴夫



審査委員 早稲田大学教授

木村 利人



審査委員 早稲田大学教授 文学博士（早稲田大学）

濱口 晴彦



審査委員 早稲田大学教授 保健学博士（東京大学）

町田 和彦

